

学習院アーカイブズ ニューズレター

Gakushuin Archives Newsletter 2021.7.15 vol.

18



大学新入生歓迎行事 1978（昭和53）年
部・同好会ほか各サークルが新入生を勧誘し履修相談などを行う恒例行事は、4月10日から12日まで3日間にわたって行われた。2020（令和2）年は中止を余儀なくされ、2021（令和3）年は新1・2年生向けに「課外活動紹介イベント」として百周年記念会館内で実施された。（大学入學課移管ポジフィルム、学習院アーカイブズ所蔵）

Contents

| | |
|-------------------------------|---|
| 学習院中・高等科保管収蔵の標本資料 | |
| 学習院高等科 教諭 加藤 政夫 | 2 |
| 原敬吾と昭和史 | |
| 学習院アーカイブズ 桑尾光太郎 | 4 |
| 業務改善と事務処理の電算化：1970～1980年代の学習院 | |
| 学習院アーカイブズ 小根山美鈴 | 6 |
| 主な活動（2021年2月～2021年6月） | 8 |

学習院中・高等科保管収蔵の標本資料

学習院高等科 教諭 加藤 政夫

中・高等科の現在の校舎は1998年に建てられた。1980年代半ばから後半にかけて中・高等科生活を送った筆者は、現在の校舎ではなく旧校舎で中・高等科生活を過ごした。当時、校舎内の「理科館」と呼ばれた棟の廊下の至る所に標本が収蔵された棚が置かれていたことを記憶している。これらの標本は新校舎となった現在、その大部分が校舎の地下に設けられた「標本保管室」に収蔵されていて、その数は7,000点を越えると考えられている。これらの標本は、そもそもどこから来たもので、現在はどのような状況にあり、そしてこれからどのような活用のされ方が期待されているのか。そんな学習院中・高等科の保管する「標本」の過去と現在についてまとめてみることにする。

1. 現在

学習院中・高等科が保管するこれらの標本はすべて自然科学系のもので、主に、動物や植物の標本である「生物標本」と、鉱物、岩石、化石などの「地学標本」に分けられる。中・高等科では、これらの標本の形態を「骨格標本・剥製標本・液浸標本・岩石標本・鉱物標本・昆虫標本・腊葉標本」と分類して管理を行っている。これらの標本が保管されている地下の標本保管室では、これらの標本に加え、かつて授業で用いられていた掛図や実験器具なども併せて保管されている。

1) 活用

「標本保管室」に収められているこれらのものは、普段は公開されずに保管されているが、年に数回は一般に公開されたり、中・高等科の授業の教材として活用されたりしている。例えば、「学校説明会」や「文化祭」の際に行われる校内見学の折には、中・高等科の教職員や生徒が案内役となり、校外の方々が標本管理室を見学する機会をもうけている。また中等科では、生物(担当:田中一樹教諭)や地学(担当:田中館宏橋教諭)の授業で標本が適宜活用されている。例えば、学習院公式ブログ2015.03.12、及び2016.03.02の記事では、標本管理室の剥製標本のスケッチを行う中1の生物の授業の様子が紹介されている。高等科でも、「総合的な学習の時間」として開講された授業のなかには、赤塚正明教諭(当時)と

松濤誠之教諭が開講した、「標本から地球を探る」という講座が見られ、「標本保管室」の標本が教材として大いに活用された例として挙げられるだろう。

2) 整理・保管

上に挙げたような例があるとはいえ、こうした「標本」や「標本保管室」が、ごく限られた機会にしか接することができないものとなっているのは、「保管」と「公開」というものが相反する性質のものであるからである。

そこで高等科では、鶴沢哲丸教諭(化学)ら理科の教諭が中心となってその画像をデジタル化し、HP上(学習院高等科HP内「高等科ミュージアム」)で公開する作業を行っている。その際、標本の画像とともに「標本台帳」に記録されている情報に基づいたデータも掲出し、標本の検索もできるようになっている。また、「腊葉標本」と「掛図」については、高等科の會田康範教諭(日本史)が調査・整理を行い、「腊葉標本」については、その成果を2009年に『学習院中・高等科標本保管室収蔵の腊葉標本』としてまとめている。

こうした標本を保管する「標本保管室」は、日ごろから温度や湿度が管理されているほか、燻蒸設備も備えられ、3年に1回、校舎全体を立ち入り禁止にして燻蒸作業も行われている。

2. 過去

1) 学習院大学から中・高等科へ

では、これらの「標本」の由来はどのようなものなのだろうか。現在、中・高等科校舎の標本保管室に保管されている標本の多くは昭和30年代から40年代にかけて学習院大学から中・高等科が引き取ったものだとしている。もともとこれらの標本は、学習院高等科が旧制高校であった時代から収蔵していたもので、「博物学」の講義に用いる教材として蒐集されたものであった。

例えば、1927(昭和2)年に建てられた理科特別教場(現在の大学南1号館)を調査した村松康行氏の「南一号館とその実験室に関する調査—昭和初期の理科教室に見られる特徴—」(『学習院大学史料館紀要』第16号)によれば、旧制高等科の理科特別教場のかなりの部分が「博物学」関連のスペースとし



中・高等科旧校舎理科館の標本（1985年）

て使われており、鉱物学、動物学、植物学なども包括する博物学の講義においては、標本を用いた講義にかなり力が入られていたと推察されるという。こうした旧制高等科が収蔵していた標本は、理科特別教場が大学理学部によって使われることにより、大学が管理するようになったようであるが、戦後は博物学がすたれたこともあり、放置されたような状態になったようである。『学習院百年史』には、「大学開設当時この建物には旧制高等科理科の教員の居室と若干の研究室・教室・学生実験室もあったが、大部分は森閑として薄埃のたまった生物や鉱物の標本室であった。」と述べられている。

理科特別教場が理学部の建物として改装されたのち、これらの標本がどのような状態に置かれたのか細かいことはわからないが、やがて高等科の生物の教諭であった浅野長愛氏が、昭和30年代から40年代にかけて中・高等科に引き取り、中等科の地学の教諭であった赤塚正明氏とともに約8年をかけて整理を行ったそうである。つまりその結果が、筆者が中・高等科時代に旧校舎の廊下（特に理科館）で目にした標本群の様子である。

そして中・高等科の校舎が1998年に現在の校舎へと建て替えられた際に、これらの標本は地下1階に新設された「標本保管室」へと収蔵されることとなった。

2) 旧制高等科収蔵の標本の由来

現在、中・高等科に保管している標本は、その大半が東京帝室博物館の天産部所蔵に由来するものとされている。それでは、これらの「標本」はどのような経緯で旧制高等科に収蔵されることになったのであろうか。

そもそも標本とは、先に触れたように「博物学」の授業で使用されるものである。『学習院百年史』を参照すると、明治期のうちから学習院の教育課程に「博物学」の名前が見られる。2016年に『輔仁会雑誌』が中・高等科の教員や赤塚正明氏に取材してまとめた記事によれば、こうした「博物学」で使用

される標本は、学習院が四谷から目白に移転した1908（明治41）年以降は、授業で使用する標本を保管するために設けられた標本室で管理されていたが、関東大震災による火災で標本室と大部分の標本が焼失してしまったそうである。

このときのことは、『学習院百年史』にも「理科特別教室・地理歴史標本室を含む第二教室と高等科教室のある建物およびその南側の特別教室の建物を焼失し、多年にわたって蒐集した貴重な図書・標本・器械などの大部分が灰燼に帰した。」とあり、さらに「授業用の図書・標本・器械類の大部分を焼失したので、物理学・博物学の担当教員はその蒐集のために京阪地方に出張し、また東京帝室博物館からも標本を借用した。」との記載が続く。

つまり、もともと東京帝室博物館の天産部所蔵であった標本を学習院が収蔵することになったきっかけは、関東大震災であったようである。この頃、帝室博物館は歴史・美術博物館へ特化する道を歩みはじめており、動・植・鉱物標本を中心とする天産部所蔵の資料は、新たな行き先を探しているところであった。ちょうどそのタイミングで関東大震災が起こり、帝室博物館は表慶館を除くほとんどの展示場所を失った。その一方で、のちの国立科学博物館となる「東京博物館」は所蔵資料のほとんどを焼失したため、これをきっかけに帝室博物館は天産部を廃止し、所蔵していた標本類の資料を主に東京博物館へと、さらに一部は、やはり震災で標本を焼失していた学習院へと移管することにした。このとき学習院へ移管された標本は、『学習院中・高等科標本保管室収蔵の腊葉標本』（学習院、2009年）によれば、動物区480点、植物区2,350点、鉱物区210点だったという。また、このとき帝室博物館から東京博物館へと移管された動物標本23,822点のうち3,558点は、その後、学習院へと貸与され、そのまま学習院に収蔵されることになった。動物標本に関するこのあたりの経緯に関しては、これらの標本のうちの3,359点がある後さらに学習院から山階鳥類研究所へ移管されることになったこともあり、「明治・大正期に収集された国立博物館の鳥類標本コレクションの検証—山階鳥類研究所所蔵の帝室博物館旧蔵鳥類標本の歴史的背景とその評価—」（小林さやか、加藤克、2017年）に詳しく触れている。

こうした東京帝室博物館に由来する多数の標本がベースとなり、さらに明倫中学校附属博物館から譲渡されたものなども加わって形成された標本群は、こうして、先述の1927（昭和2）年に新築された理科特別教場（現・南1号館）に設けられた専用の標本室に収蔵され、「博物学」の授業で活用されることになったのである。

原敬吾と昭和史

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

作家の津村節子は、1951（昭和26）年、開学して2年目の学習院大学短期大学部（1953年、学習院女子短期大学に改称）に入学した。旧制高等女学校卒業の津村にとって、短大を受験するには新制高等学校卒業の資格が必要だった。その認定試験を短期大学部の「赤れんがの建物」で受けたときの光景を、津村は次のように記している。

試験の時刻が迫っても誰も来ないので、部屋を間違えたのか、と不安になって来たが、定刻になると、答案用紙を持った男性が入って来られ、落ち着いてゆっくりお考えなさい、と言われた。受験者は、私だけだったのだ。（略）結果は後日通知があるのだろうと思っていたら、別室で待っているように言われ、間もなく最初の先生がはいって来られた。そして微笑みながら、高等学校卒業の資格があると認めます、と言われ、私の肩にオーバーコートを着せかけて、「しっかり勉強して下さい」と励ましてくださった。私は胸が詰まって何も言えず、軍靴で傷ついた床に落ちる涙を手の甲でぬぐい、深々と頭を下げた。そして、この学校で学びたいと切望した。（『私の青春』『合わせ鏡』所収、1999年）

ここで登場する「先生」が原敬吾教授だったことは、津村が学習院公開講演で述べている（「小説と取材」『学習院広報』12号、1976年7月1日）。原敬吾は1933（昭和8）年に第一高等学校を、1936（昭和11）年に東京帝国大学文学部国史学科を卒業、東京帝国大学史料編纂所嘱託や兵役などを経て、戦後の1947（昭和22）年4月、学習院女子中・高等科に着任し社会を担当した。1950（昭和25）年の短期大学部開学にともない同教授に就任して、初代教務課長をはじめ庶務課長、学習院図書館戸山分館長、文科・人文学科・文化史専攻の初代主任、一般教育主任といった役職を歴任した。授業科目は「日本史」「世界史」「日本文化史」「文化史演習」などを担当し、たとえば1972（昭和47）年度の学習院女子短期大学『学生便覧』には次のように紹介されている。

日本近代文化史

幕末開国以後のわが国が、現代に至るまでに国際間にどのような地位を占めてきたかを実証的に検討し、近代文化と呼ばれるものの本質を考察することに及びたい。



原敬吾 (1912～1975)

文化史演習Ⅰ（日本の近代化）

幕末から明治初年にわたる期間に、日本の近代化に貢献した人たちについて、各自で分担して調べてもらった上で、討議を加えて行きたい。学年初めには、『ベルツの日記』（岩波文庫）の購読から始める。

文化史演習Ⅱ（昭和史の諸問題）

昭和前半20余年の諸事象のうちから、主要な問題のいくつかを重点的に取り上げ、各自がある程度の基礎知識を得た上で、見解を交換して検討したい。テキストは、原敬吾『動乱の昭和史』（講談社現代新書）を用いるほか、必要に応じて指示する。

主要著作刊行物には、『黒住宗忠』（1960年）、『戦後の精神史』（1967年）、『動乱の昭和史—民族か階級かの問題をめぐる—』（1968年）、『難波大助の生と死』（1973年）がある。黒住宗忠は江戸時代末期の教派神道の開祖であり、難波大助は1923（大正12）年に皇太子・摂政宮狙撃（虎ノ門事件）を起こし大逆罪によって処刑された。原がなぜこうした人物の評伝を執筆するに至ったかに興味を抱き、他の著作も調べ始めたところ、『輔仁会雑誌』174号（1952年12月）に掲載された「高等学校の頃」と題するエッセイに出会った。そのなかで原は、1930（昭和5）年から33年にかけての第一高等学校在学時について、「少くともその前半を私は全くマルクス主義の重圧の下に過ごした。どのような態度でそれに対し、どのように行動するかということ、ただそれだけが日夜私の心を占めていたといつても誇張ではない」とし、続けて次のように記している。

入学発表の掲示板のすぐ横には、この問題で処分を受けた学生たちの名が貼り出されているというけわしい時節で、むろん共産党宣言などという本は陽の目を見ることすら許されぬ時代であった。そして学校では、毎週の倫理の時間にマルクス主義の害毒が繰り返して説かれていた。近づいてゆくことだけでも危険なことは、わかっていた。けれども私にはまた私なりに、行けるところまでは行って、自分の眼で見定めなければ、という張り詰めた意地のようなものがあつた。どんな困難を冒してでも真実を求めたい無鉄砲な気持であつた。本を読み、また人から直接に教わることは何でも教わろうと思つた。そしてその結果は、留置場生活をする様なことにもなり、停学にもなつた。

原が一高に入学した頃、日本は深刻な恐慌下にあり、高等学校生や大学生など青年知識人の間では資本主義の矛盾を解明するためのマルクス主義が支持された。もちろん治安維持法の下では、学生のマルクス主義への関心は読書会のような研究段階から厳しく弾圧されていた。原が検挙・留置された時期は1931（昭和6）年初頭と推測され、東京大学駒場博物館所蔵の第一高等学校関係資料によると、同年4月1日付で他の学生7名と共に「不穏ノ行為」により停学処分を受け、留置から釈放された後であろう5月11日に停学が解かれている。

復学後の原は思想的葛藤や病氣療養を経て、また立沢剛・三谷隆正・菅虎雄ら一高教授の援助などもあって、「私の内的生活に…変革が引き起こされた」。そしてその変革によって「新たな視野が展けてみると、それまでの私が巨大な相手として懸命に取り組もうと焦つていたマルクス主義は、急速にしぼんで小さな対象になつていつた。その時以来、私には一自他双方に対して一社会改革そのもののために身を挺する気持はなくなつてしまつたのだ」と続け、原は「高校生活の末期は、私にとってそのような生涯の転機であつた」と自らの転向体験を綴っている。原が学習院に職を得た経緯は明らかではないが、女子中・高等科に着任した際の女子部長だった三谷隆信は、三谷隆正の弟だった。

一高での原の同学年にはマルクス主義の影響を受けた者が多く、在学中もしくは帝国大学進学後に共産主義運動に関わり弾圧の対象となつた。なかでも「寮で一年間を文字通り机をならべて暮した伊藤律君は、とうとう本物の革命家になつた」。伊藤律(1913

～1989)は、一高在学時の1931年から共産主義運動に参加し、翌32年12月に放校処分となつた。その後の波乱の生涯については省略するが、原のエッセイが『輔仁会雑誌』に掲載された1952（昭和27）年は、当時日本共産党幹部だった伊藤律が党の内部抗争を経て地下に潜行し、さらに中国に密航した直後の時期であつた。その後伊藤はスパイ嫌疑で共産党を除名されたうえ、長らく中国で投獄され消息不明となつていたが、1980（昭和55）年に帰国し大きな話題となつた。伊藤はゾルゲ事件（1940年）発覚の端緒をつくつたスパイと見なされ、「生きているユダ」（尾崎秀樹）、「革命を売る男」（松本清張）と非難されてきたが、1990年代以降に新たな史料の発掘と検証が進み、その汚名は濯がれつつある。

伊藤の生存と帰国を知らぬまま、原は1973（昭和48）年にガンを宣告され、闘病の末1975（昭和50）年3月に死去した。原の遺稿「闘病日記一涙ももはや涸れ果てて」（『心』1975年6月）は、学習院での教育に情熱を注いできたことを次のように記している。

（1974年）五月二十二日

自分がそこに居る方が、居ない場合よりもよいことが多いような人間、そういう存在になりたい、というのが自分にとっての終生の努力目標の一つだった。特に授業の場合、学生、生徒の何パーセントかにとって、その一時間の話をきいた方がきかなかつた場合よりよいというような、そういう授業を展開したいと考えて及ばずながら微力をつくしてきた。

そのようにして自分が戦後の二十余年を教師として打込んできたことは、人の仕事を直ぐにライフワークという如き龐大な著作で評価したがる世人から見れば無価値に近いかも知れぬが、自分としてみれば、その間から派生した小さな著作など実はおマケに過ぎないのである。

本稿は原敬吾の著作ならびに関係資料を、つまみ喰いのように取り出し並べただけに過ぎない。しかし教員をはじめ学習院関係者の人物像を資料によって見直していくと、ドラマのような昭和史の様々なシーンに接することができると思つて改めて感じた次第である。

業務改善と事務処理の電算化：1970～1980年代の学習院

学習院アーカイブズ 小根山 美鈴

1. はじめに

情報技術の革新とそれに伴う業務環境の変化は、今に始まったことではない。学習院では、1960年代に理学部の教育研究用にコンピュータが導入された後、早くも1970年代には事務業務改善の先に電算化が見据えられるようになった。本稿では、この時代における事務の電算化に光を当て、学習院アーカイブズ所蔵資料からその変遷を紹介する。

2. 事務処理のためのコンピュータ創成期：

MELCOM1101ⁱ⁾ からMELCOM7500へ

学習院におけるコンピュータ導入史については、『学習院大学五十年史』上下巻（2000年3月、2001年10月）、『学習院大学計算機センター年報』創刊号ⁱⁱ⁾（1981年3月）に詳しい。これらの文献によると、1962（昭和37）年、学習院大学理学部・菅忠義研究室の一部として南2号館に計算機室が建設された。翌年3月、三菱電機製のMELCOM1101が同室内に設置され、その後、入試のデータ処理を学内で行ったことが大学全体に大きな影響を与えたのである。

MELCOM1101による入試データ処理業務は、本機が事務処理用でないものの、菅研究室と在学生の試行錯誤により、1965（昭和40）年2月の入試で実現した。当時、大学入試データを大学所有のコンピュータで処理したのは、日本では学習院大学が最初とされる。本方式による入試データ業務は7年間続いた。大学全教職員が参加する入試データ処理にコンピュータを用いたことが、電算化を速やかに学内に浸透させる効果をもたらした。

1972（昭和47）年頃になると電算化の有用性が広く認識され、更に高性能な新コンピュータ導入の気運が起こった。それは教育研究・事務関係双方が本格的に利用できるコンピュータを求める動きとなり、1974（昭和49）年3月、MELCOM7500の導入へたどり着く（図1）。同年6月、最初の大学附置機関として大学計算機センター開設の流れとなる。



図1：MELCOM7500が配備された計算機室（総務部移管資料）

3. 業務改善計画とコンピュータ導入

計算機センター開設より遡るが、1972年度から2年間、全学横断的な業務改善計画が行われた。当計画は1977（昭和52）年の学習院創立百年に向けた新しい教育研究計画や、記念事業プロジェクト等に即応できる事務体制整備を目標としており、同時に事務組織の効率化を図ることも目指していた。推進主体は、1972年1月に設置された企画室である。

企画室が当計画の進捗を公表した媒体は、『学習院広報』第1号～第4号（1972年11月～1973年10月）である。本誌を通して、1972年度が業務改善計画立案のための調査検討期間、1973（昭和48）年度が計画の実施と最終段階としての電算機（＝コンピュータ）導入期間であったことが伺える。改善対象は企画室、学務部、庶務部、経理部、大学教務部、学生部、大学庶務部、女子短期大学、大学図書館であり、調査検討期間に産業能率短期大学経営管理研究所（現産業能率大学総合研究所）調査員が調査、指導等を行った。

具体的な実施は、MELCOM7500導入後に進められ、数年かかった模様である。企画室にコンピュータの専門職員が置かれ、1974年から百年記念事業関係のデータ処理、卒業生ファイルの作成が開始された。事務部門のコンピュータ使用は、その後も教職員の給与計算、学生の履修や成績管理など進められ

た。

4. 関係文書

一連の動きがわかる資料については、他に下記資料が存在する（図2）。

- (1) 『学校法人学習院調査報告書』産業能率短期大学経営管理研究所、1973年2月
- (2) 「事務組織関係（業務関係過年度）」1973年
- (3) 「計算機センター」1973～1977年
- (4) 「コンピュータ導入委員会資料」1975～1976年



図2：(1)～(4)の資料

(1)は、専門調査員による95頁の報告書である。改善対象にある部署等の状況と改善案、分掌および組織機構の問題と改善方向を示した冊子である。院長や役員への報告後、関係教職員へ印刷・配付された。質的・数値的に組織が抱える課題をあぶり出しており、現代でも参考になる資料である。

(2)～(4)については、フラットファイルや紐綴じ等から成り、部内共用あるいは職員による手元文書と考えられる。(3)は、教務部職員によるコンピュータ導入委員会（1973年4月発足、次いで8月に事務関係コンピュータ導入委員会発足）関係の配付資料や事務打合せ会メモ等が綴じられた簿冊である。(4)は、コンピュータ導入委員会の構成委員であった大学図書館職員の資料である。

いずれも各部署単位かつ断片的な業務改善案とコンピュータ導入に関する文書であるがゆえに、計画全体の性格を表すものとは言えない。しかし、これらの資料を俯瞰すると、業務改善計画とは、第一に組織を見直す機会を作り、第二に職員の働き方をも変える大きな転機となる出来事だったことが伺える。今後、企画室の記録が学習院アーカイブズに移管されることがあるならば、推進主体側による意思決定の流れがわかり、一連の事業を理解するための

情報に厚みを増すだろう。

5. その後とこれから

『雑件録 昭和58年度』の簿冊中に、他大学から総務部宛に事務電算化の準備に伴うアンケート調査の依頼と、総務部による回答文書の写しが綴じられている。回答文書によると、1983年10月時点で既に4種の事務用電算機の導入・入れ替えがなされている。また、「学内機械化業務一覧」も添付されており、先の業務改善計画の対象部署における業務の中で何を電算化したのかが具体的にわかる。

手書きで事務処理をする時代から、1970年代の事務電算化を経てしばらくののち（図3）、職員一人につきパソコン一台が配置される時代へ変遷するⁱⁱⁱ⁾。各業務ではシステム開発の発展が求められるようになり、現在も情報化の推進は加速する一方である。

当時の業務改善計画全てが成し遂げられたのかどうかは定かでない。しかしこの時代は、学習院において事務の歴史における大きな転換期であったと言っても過言ではない。情報技術の発達に伴い、そのことが業務や働き方をも変わる流れは、現代にも通ずるのではなかろうか。過去の出来事を知ることが今後のヒントにつながることを願いながら、アーカイブズの活動に励む毎日である。



図3：アルバム「本部」より執務風景（総務部移管資料）
1982（昭和57）年10月

- i 科学技術計算を主たる目的とする、三菱電機最初のデジタルコンピュータ。1964年度より、理学部数学科の必修科目「計算機（概説・実習）」として使用された。1976年10月、国立科学博物館へ寄贈
- ii 特に以下を参照。菅忠義「学習院大学における計算機の導入」pp.5-11、二宮洋太郎「メルコム導入のころ」pp.12-14
- iii 「事務組織内にパソコン配備される！」『学習院広報』第61号、1999年12月15日、p.12

主な活動 (2021年2月～2021年6月)

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の更新
- ②非現用文書ファイルの評価選別 (2部署)

◆学内各部署に保存されている資料の調査・整理

- ①女子大学語学教育センター (3月24日)



女子短期大学アルバム (1953年)

◆所蔵資料の整理・保存

- ①移管文書の選別・整理・目録作成
- ②学内刊行物、書籍
- ③自動演奏ピアノの維持管理

◆資料受入れ・貸し出し

- ①中等科職員室スナップ (旧清明寮、1977年)
- ②大学史料館春季特別展「学習院とスポーツ」への資料出品



展示出品資料「重要雑録」
(赤坂離宮での運動会開催を通知する文書、1890年4月)

- ③中等科体育倉庫資料 (2020年調査・整理、17号参照) の移管

◆講演会、教育・広報支援等

- ①『学生生活の手引』、大学案内パンフレット等への編集協力
- ②新任職員研修「学習院の歴史—その始まりと戦後の再出発—」(4月2日)
- ③女子部 中3道徳授業「資料からみる女子部の歴史」(6月18日)



授業は放送室から各教室に中継され、女子部および学習院アーカイブズ所蔵の資料が紹介された。

◆その他

- ①『学習院百年史』全三編、PDF版による全編をホームページで公開
<https://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/hyakunenshi.html>

学習院アーカイブズ・ニュースレター第18号
2021 (令和3) 年7月15日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285 (直通)
事務室 西5号館 (本部棟) 地下1階
<https://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>